在京石鳥谷 町人会だより

＜連絡所＞在京花巻ふるさと会事務所
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋
4-4-8 東京中央ビル 603 号室
TEL　03-6256-8082
FAX　03-6526-8083
＜事務局＞ 〒270-0127 千葉県流山市
富士見台 1 - 10 - 40　高橋弘美
TEL 0471-54-8597

（題字　旧石鳥谷町長 高橋公男 氏）

石鳥谷夢まつりポスター

御挨拶

在京石鳥谷町人会会長
高橋　弘美

会員の皆様こんにちは。高橋弘美でございます。

皆様におかれましてはお健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

令和元年最初の号となる「在京石鳥谷町人会だより」をお届けするにあたって、平素より皆様から寄せられたご支援、ご協力に対しまして厚く御礼を申し上げます。

今年は改元が行われ、5月1日から「令和」へと改められました。昭和生まれの私にとって改元は二度目のことなのですが、「平成」への改元の時と比べ大きく違っていると思いますのは、日本中の雰囲気がお祝いムード一色に包まれていることです。これは平成天皇陛下がご存命中に地位を退かれたことにほかならないのですが、報道映像で知る限り、新天皇陛下の凛とした中にもはつらつとしたさわやかなお姿を拝見しますと清新さを感じる高揚感を覚えますし、上皇様ご夫妻には大きな肩の荷を降ろされてほっとされたご様子を感じるにつけ、本当にお疲れ様でした、ありがとうございました、と思わずにはいられません。まさに新しいすがたでの改元をだれもが望ましく思うかたちで行われた結果なのだと思います。

そうした中で最近ちょっとだけ聞き飽きたかなと思うものに「令和初」という言葉があります。

これまでの報道などから拾ってみますと、令和初の40度台最高気温は8月14日上越市(40.0度)、令和初の夏の甲子園王者は履正社高校(8月21日)、令和初の国体(茨城)に天皇皇后両陛下がご出席、令和初の国政選挙(参議院)は(7月21日)、令和初のビックカップルは小泉進次郎議員と滝川クリステルさんと報道されたが、実はその前に南海キャンディーズの山里亮太と蒼井優が令和初のビックカップルと言われていたのにぃー、と山ちゃんがグダグダ、がっくりした・・・等々（拾いきれません・・・）。

これから行われる秋から冬にかけての各種イベントにも「令和初」の冠がつくものがいっぱい出てくるだろうなと思います。

そして、そうなんです、我が在京石鳥谷町人会も、この11月4日は「令和初の総会・親睦交流会」開催の日であります。昨年の創立30周年記念総会では皆様のご協力を頂き盛会理に行うことができたことを踏まえ、今年の開催は令和初だぞと意気込んでみたものの、考えてみますとそんなに簡単に内容が劇的に変わるものではありません。しかしながらこれまでの歴史と伝統を維持しつつ、令和という新しい時代とその変化に沿って少しずつ、少しずつ「在京石鳥谷町人会」の運営を新しく変化させていきたいとも思っております。

今年もふるさとからたくさんの皆様がお越し頂くことになっておりますし、協賛企業の皆様から暖かいご支援の品々を頂戴することになっております。本当にありがたいことであります。会員の皆様には多くの方のご出席を頂いて、ふるさとからのご支援に感謝しつつ会員相互の親睦も深めて頂きたいと思います。

これからも役員一同頑張って参りますので、引き続き皆様のご協力、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

「第45回岩手県人の集い」に参加して

川村　政義
（副会長・新堀出身）

「第45回岩手県人の集い（令和元年度岩手県人連合会総会）」は、6月2日（日）ホテルラングウッド2階「飛翔の間」において盛大に開催されました。全体の出席者は320名で、「在京花巻ふるさと会」からは、瀬川会長をはじめ14名の参加がありました。

第一部の総会は定刻の11時に始まり、鈴木文彦連合会会長の挨拶に続き前年度の活動及び会計決算、今年度の活動目標及び予算、役員の改選についての会務報告」がありました。なお今般、瀬川紘一在京花巻ふるさと会会長が岩手県人連合会副会長として選任された旨報告があり、懇親会の冒頭ご本人から新任のご挨拶がありました。また、石鳥谷町新堀出身の佐々木順一岩手県議会議長からの祝電が披露され、「会の盛会を祈念する」旨読み上げられました。

この会のメインイベントの一つでもある「第45回岩手県人連合会総会」としての県勢への協力のための決議が次の八項目にわたり提案され承認されました。

❶ 防災復興プロジェクト2019やラグビーワールドカップ2019釜石開催などを通じて東日本大震災津波からの復興を支援
❷ お互いに幸福を守り育てる希望に満ちた岩手の創造に総力を結集
❸ 国際リニアコライダー（ILC）を誘致し、宇宙を誕生させた大爆発ビッグバンの再現実験に協力
❹ 岩手ファンを増やし岩手への定住・交流の拡大」に協力
❺ 産業の振興・雇用の場の拡大に知恵を出し合う
❻ 平泉の世界文化遺産をはじめとする「黄金の国、いわて」の魅力をPR
❼ 岩手の将来を担う人づくりに貢献
❽ 誇れる岩手の環境の実現に協力。

これらの決議に関し、達増岩手県知事からは祝辞のなかで感謝の気持ちと、いくつかに関連し県としてすでに復興事業のできたものを含め経過状況について以下のとおり説明がありました。

① 今年の三月には、JRの宮古と釜石の不通箇所が全てつながり、三陸鉄道リアス線は北から南まで一本につながった。また内陸と海岸地域との高速道路網（三陸沿岸道路）が整備され内陸と海岸地域との行き来がますます盛んになることが期待され、また、花巻空港からの上海、臺灣への国際定期便、宮古と室蘭を結ぶカーフェリーなど、震災前に比べ便利になります。皆さんにも大いにご利用いただくことを期待している。

② 産業の振興・雇用の場の拡大という点で、金ヶ崎町にある東日本最大のトヨタ東日本工場に続き、この度、雇用千人規模の東芝メモリーの新工場が完成する予定。このあと第二棟、第三棟の施設建設が視野に入っており、一棟に千人が働く規模の工場は、これまで県内にはなかったことであり、岩手県始まって以来のこと。今後、生産と雇用の伸びという点では岩手県は例外となっている。移住、定住を含め人の流れが岩手に向かうようにしたい。

③ また、元号に触れられ、「令和」の字のもとになった「万葉集」掲載の大友旅人邸での歌会は、当時の首府である奈良ではなく、福岡県大宰府という地方で行われたものでそれからとったことは、地方自治を担当する身としては、すばらしいことだと思っており、「令和」こそ地方の時代になるのだと受け止めている。

最後に天皇皇后陛下のことにも触れられ、両陛下は岩手に対し並々ならぬ親しみを感じているように思われ、お会いするたびに直に感ずるそうである。

とくに達増知事にとって、皇后陛下は外務省時代の一年先輩であり、在職中大変お世話になったそうであり、よく存じ上げているからかもしれない。

第二部の懇親会は12時20分からおこなわれました。今年度のアトラクションは、横浜・東京在住者による「金津流横浜獅子踊」の演舞で会場は大いに盛り上がりました。獅子踊には多くの流派があるようですが、「金津流」というのは、奥州市江刺区梁川地区に200年にわたって継承されてきているそうです。私たち石鳥谷人がこれまで目にしてきた春日流とは少し違うなという感じをうけました。

会員同士の懇談で会はさらに盛り上がり、最後は全員で「ふるさと」を合唱し、来年またお会いすることを楽しみに閉会となりました。

前列右側３人の女性は石鳥谷町人会会員

浅草で近隣ふるさと会

川村　三郎
（副会長・好地出身）

令和元年6月29日(土)、朝から小雨が降り雲も低く垂れこめ肌寒く、楽しい集まりなのに少し気が重かった。しかし浅草に着いた時、久しぶりで変わらない街並みが懐かしく感じました、でも街の雰囲気は大いに変わっていました、肌の色、目の色の違った人達と、飛び交う言葉は殆ど大声の外国語で溢れかえっていました、まるで外国です。

浅草ビューホテルの27階の会場に着きました、素晴らしいロケーションです。残念な事に、目の前にそびえ立つ「スカイツリー」は、期待に反して展望台から上が雲の中でした。

自己紹介する石鳥谷町人会の面々

開会の挨拶で、今回の近隣ふるさと会懇親会担当の在京東和町友会蟹沢会長より紹介されました「東和町友会担当の前回近隣ふるさと会は、平成23年の第17回でしたが、その時もこの浅草ビューホテルの27階でまさにこの部屋でした、そして窓の外には「スカイツリー」が眺められました、高さも同じ位でした、但し8年前はまだ工事中で完成前でした」と教えて頂きました。残念ながら私は参加していません、残念です。

それにしても今回は部屋に人があふれていました、蟹沢会長の話では、参加者は8つのふるさと会で45名だそうです、我が在京石鳥谷町人会も8名の参加にて大いに貢献しました。

来年の第26回は石鳥谷町人会の担当です。石鳥谷町人会では、前副会長（総務担当）の大竹参与が、皆さんに喜んで頂ける会場を探し、奔走してくれました。候補地として、「葛西臨海公園」を候補に選びましたので皆様に報告いたしました。来年はオリンピックの年でもあり、時期の設定が難しいのですが、大いに期待して頂き皆さんに喜んで頂ける様頑張らなくてはと、決意を新たにさせられました。

花巻人の集い

荒瀬富姫子
（幹事・八日市出身）

実に素晴らしい近隣ふるさと会でした。

7月6日お茶水のホテルにて、開催されました。初参加の高校の先輩を紹介の目的もありました。会はセオリー通り　瀬川会長の挨拶から始まり、上田市長等の祝辞　乾杯の後歓談。一年ぶりで再会した甲子園球児だった同級生。初参加のかつて初代応援団の大先輩、昔のエピソードが聞けて楽しめました。中でも昭和46年　花巻北高が甲子園出場の際応援の様子、スタンドの和太鼓禁止。急遽吹奏楽部のドラムでの応援、調子があわず　苦労したことなど・・・。

会のメインイベントは金津流鹿踊り（横浜在住）。なんともダイナミックな演舞で　腹の底までひびく太鼓の音。帰省しても観ることがなかなかできない郷土芸能、東京で観られるなんて幸せです。（石鳥谷の郷土芸能もしかり）時間が足りず同期生である　上田市長とあまり話ができなかった事が残念でした。

第19回「こびり笑楽校」の集い

飯塚　悦子
（副会長・八幡出身）

オモシロ・オカシナ学校＝「こびり笑楽校」!!　主催は蟹澤政志氏（東和町友会会長）で校長先生でもある。

5月12日（日）恒例の「こびり笑楽校」（同日に入学と終業が行われる珍しい学校）が開校された。入学生は約30人（内石鳥谷町人会からは毎回参加の大竹さんをはじめとして9名、各ふるさと会のメンバー・校長先生の知人等皆楽しいお仲間達）。私たち生徒は校長先生の指示で有って無いような時間割の授業を受ける。級長が出席をとる（会

費の集金）。年齢も遅刻も関係なく誰も皆1年生！

カリキュラムは次のとおり。

一時限目　野外調理実習＝山賊料理バーベキュー。野菜・肉・魚・キノコ等実に豪快な山賊料理に生徒は舌鼓を打ちたらふく食べる。

二時限目　大人のお楽しみ時間＝各種アルコール飲み放題。さてさて一番のお楽しみ飲み放題、喉をならし飲むは食らうは・・・。酒焼けか日焼けか赤ら顔。テンションハイ！

給食　流しそうめん。酒で熱くなったお腹に冷たいそうめんを流し込む。少々お腹落ち着く。

三時限目　音楽①＝生バンドに合わせて唄おう、踊ろう（校長先生の知人数名の参加によるロックバンド）。懐かしの1970年代の曲を野外ステージで楽しく踊る（酔いで足元おぼつかない）。

四時限目　音楽②＝カラオケ唄い放題、それぞれに自慢の喉を披露。曲により校長先生が笠と合羽で股旅姿に変身。超ビックリ!!。

合間に校長先生が趣味で飼っている烏骨鶏（卵は販売）・ホロホロ鳥・庭園の散策（校長先生手造りのSLも設置されている。露天風呂もアリ、花炭も焼いている）。そのうち、時間割に関係なく酔いが廻り、満腹になり、校長先生も生徒も関係なく自由勝手に動き回る。一日がとても短く感じた（命の洗濯とはこのことか）。

この会は蟹澤さんが個人的に主催している会で、立場も役職も何も関係なく同等に参加できる楽しい会です。今回は初参加の高橋会長と往復共にご一緒でしたが楽しかったと思います。帰路は大迫人会の内村会長と3人道中でしたが道を間違えてドライブ時間が少々長くなってしまいました。蟹澤校長先生ありがとうございました。次回の開校を楽しみにしております。

「出川哲朗の充電させてもらえませんか？」

テレビ東京の番組で花巻が紹介

なぜか菊池善男さん（町人会監事）登場（左端の男性）。前列右が石原良純氏、一人置いて出川哲朗氏

8・17に放送された「出川哲朗の充電させてもらえませんか？」という旅バラエティ番組で、今回、釜石大観音を出発し、大沢温泉を目指すなかで花巻も紹介されました。

放送を見て驚いたのは、岩手県花巻市出身の著名人である三鬼隆（日経連元会長、八幡製鉄初代社長）が出川哲朗氏の母方の伯父であったことです。そして岩手軽便鉄道創設者のひとりである三鬼鑑太郎は曽祖父にあたり、彼が少なからず花巻と縁がある人物であることを知り驚きました。

下の写真は、大沢温泉まで30キロとなった時点で東北新幹線新花巻駅などを横切り、「宮沢賢治記念館」を訪れた際、イギリス海岸にも立ち寄り、近くにある無料休憩所「くるみの森」を訪ねた際、ボランティア活動を行っていた方々に出会った時の映像のようです。なぜか菊池善男さん（町人会監事）が左端に写っており、前列右に石原良純氏、一人置いて出川哲朗氏が写っています。

この施設は、地元の有志がボランティアで運営しており、お茶のサービスや、宮沢賢治関連の資料を展示しているようです。

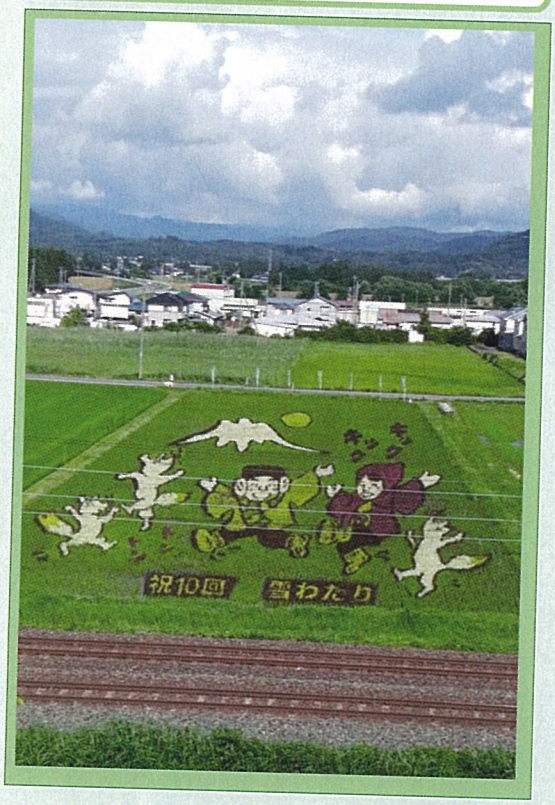
いわて花巻物産展開催

「協同農産」さん出店（於「銀河プラザいわて」）

川村　三郎

6月9日(日)「銀河プラザいわて」で開催中の花巻物産展に行ってきました。この企画には、「協同農産」さんも出店しており、社長の奥さんがお見えになっていました（写真左側）花巻ふるさと会からも、皆さん各自いらしていた様です。

八幡田んぼアート



令和元年度のデザインは、「雪わたり」

八幡まちづくり協議会（実施主体は八幡田んぼアートプロジェクトチーム）によるプロジェクトは、今年で10年目となります。令和元年度のデザインは、「雪わたり」で宮沢賢治の作品『雪わたり』からとったとのこと。

この企画は、八幡地区の活性化を図ることを目的として、地域内外の交流を図り、楽しみながら取り組むことが可能であるとともに、次世代を担う子供たちに夢を与え、さらには物産販売にも寄与できることを確信して実施されているそうです。

故郷（ふるさと）「石鳥谷夢まつり花火大会」に参加して

佐藤　忠男

（副会長・好地出身）

私にとっては二度目の故郷（ふるさと）の旅立ちをして早30年、来年は傘寿を迎えることとなり2年連続して故郷の花火大会に参加、今年も石小の同級生の皆様と共になつかしくうれしい時を過ごさせていただきました。その折、3年生まで新堀小学校に通学した話から担任の「朝子先生」という恩師のお話が出、大変失礼ながら、先生は疾うにお亡くなりになっていらっしゃると思っておりましたが、友人が「先生は貴方の実家の近くに元気にお暮しですよ」とのお話しを伺いまさかと思いつつ10日後に来盛する用事があり、その折に先生と再会の段取りをお願いしました。何とも思いもよらない花火大会になった次第です。

そして約束の10日後8月24日、同級生の友人と恩師宅を訪れ70年ぶりの再会を果たすことができました。先生は女学校を卒業し、すぐに新堀小学校の先生となられ、私共が最初の教え子とのこと、それ故、歳の差は10歳しかなく現在88歳とのことでした。お若くこれからも何度かお会いできる高校までの唯一の恩師がご存命であったことがこんな素晴らしい奇跡を私に与えて下さった何とも素敵なる石鳥谷の花火大会でのひとこまでありました。

石鳥谷・夢まつりポスター
東京都営地下鉄主要駅に掲出（ポスターは表紙参照）
令和1年7月26日(金)～8月9日(金)

第31回石鳥谷夢まつりは、8月13日 好地の大正橋公園で開かれ、約7千発の花火が石鳥谷の真夏の夜空を彩り、そして北上川の川面を幻想的かつ鮮やかに照らし、約4万人の観客は歓声を上げていました。我が「在京石鳥谷町人会」も毎年協賛させていただいており、本年も9名の会員が参加しました。この日の会場内には町内の福祉施設や学童クラブなどが作った8基の行燈が会場を照らし、石鳥谷中の生徒が太鼓の演奏と「石中ソーラン」を披露して会場をさらに盛り上げていました。

この夢まつりに先立ち7月26日（金）から8月9日（金）までの2週間、東京都内の都営地下鉄の主要駅では、本号の表紙として利用させていただいた広報ポスターが掲出されておりました。掲出の確認できた駅は次のとおりです。いずれも都営地下鉄の駅です。

都営浅草線（三田駅、泉岳寺駅）、都営三田線（三田駅、内幸町駅）、都営新宿線（新宿三丁目駅、市ヶ谷駅）、都営大江戸線（新宿西口駅、上野御徒町駅、大門駅、西新宿五丁目駅）。

一部、ポスター掲出の様子を下に紹介させていただきました。

三田駅（都営浅草線）

花巻まつりツアー 2019
令和1年9月14日(土)～15日(日)

石鳥谷町人会からも7名参加

在京花巻人会主催による「花巻まつりツアー2019」は9月14日(土)～15日(日)の2日間おこなわれ、両日とも晴天に恵まれ楽しいひと時を過ごさせていただきました。この祭りは400年以上の伝統を持っており、我々は、主会場である上町のおまつり広場で見学させていただき、花巻ばやしの音色に合わせた豪華絢爛な風流山車やギネス世界記録に認定された威勢の良い掛け声に合わせたみこしのパレートを目の前にすることができ圧巻でありました。翌日の大迫ワインまつりでは、今年の果実感に富んだおいしい一杯を堪能しました。同会場では、即売や試飲も行われ、グラスを手にした人でにぎわっていました

横浜散歩ーララ物資生みの親、岩手県人・浅野七之助のことー

川村　政義

「ララ物資」と脱脂粉乳

「ララ物資」という用語は、現在でも70歳以上の年齢の方はご存知かと思います。私自身は直接その恩恵を被ったか否かわかりませんがイメージとして、どうしても「脱脂粉乳」と結びつけてしまいます。

よくテレビ等で終戦直後子どもだった方に対するインタビュー等で「・・・おいしくない、苦手・・・」という思い出を述べられているのをよく見聞きします。しかし、味はともかく栄養状態の悪化した戦後の子どもたちの命を救ったことは間違いなく事実でありましょう。

私自身は、多分、ララ物資を契機に昭和24年から始まった学校給食定番メニューのひとつとして、アルミ製の大きなバケツで教室に運ばれ、しゃくしで一杯ずつアルミカップに注がれた脱脂粉乳をいただいたことをよく覚えています。周囲の人達がいうほどまずいとは決して思いませんでした。むしろおいしいと思ったぐらいです。

香醇皇后の歌碑

現在私は、埼玉県所沢市から神奈川県横浜市の某大学病院まで、西武池袋線、東京メトロ副都心線、東横線、京浜急行を利用し月三回、横浜市内の病院に通院しています。そのうち一回は、予約時間が比較的遅いので、横浜駅からウォーキングしています。コースメニューは三通りあり、今回のテーマに関係するルートは海辺ルートです。

横浜といえば、デートでおなじみの「港の見える丘公園」「山下公園」は有名であり、多くの人の定番コースとなっています。しかしこの横浜の地は見るべきところがあまりにも多く、私は最近開発・整備された「みなとみらい地区」にある臨港パークが好きです。ここは、横浜港を臨む抜群のロケーションが目の前に広がっており、広々とした芝生広場、潮入りの池、ゆるやかにカーブする水際線や、みなとみらい地区のビル群を望むベストスポットのアーチ橋、公園内を華やかに飾るオブジェなど、見所満載の憩いのスペースです。私はいつもここを朝7時から1時間程かけてゆっくり散歩します。朝早いので、散歩やジョギングする人のみで、閑散とした公園は、澄み切った空気と適度の潮の香りで至福の一時を過ごすことができます。

この地区の一画である海上保安庁横浜海上防災基地の門の横にあたる臨港埠頭前に香淳皇后の歌碑があり次の歌が刻まれています。その隣には、ララ物資の簡単な説明となぜこのような歌が詠まれたか次のように説明があります。

ララの品つまれたる見て
とつ国のあつき心に
涙こほしつ

あた、かきとつ国人の
心つくしゆめなわすれそ
時はへぬとも

「第二次世界大戦終戦直後の混乱期、日本は衣食住すべてに不自由していた。こうした中、全米の各宗教団体を中心とする海外事業運営篤志団アメリカ協議会は、特に日本をはじめアジア諸国の救済事業を行うために『アジア救援公認団体』を設置し、ミルク類、穀物、缶詰類、油類等の食料をはじめ、衣類、医薬品、石鹸、裁縫材料などの消費物質のほか、乳牛や山羊などを送り、多くの日本人を救った。・・・」。この碑は平成13年、地元横浜の有志によって建てられたものだといいます。

香淳皇后は、昭和24年10月19日に昭和天皇と「ララ」倉庫のあるこの地に行幸啓になられ「ララ」物資を送って頂いた方々への深い感謝の気持ちを歌で詠まれたものだそうです。香淳皇后について改めて説明する必要はないと思いますが、昭和天皇の皇后であり、今上天皇の祖母にあたる方です。

皇室が海外訪問先で日系人と交流を続けられるのは、戦後復興を支えた歴史を重視しているからだろうともいわれています。

浅野七之助のこと

ある日、病院からの帰途、特に目的があったわけでもなく歌碑の近くにあるJAICA横浜の海外移住資料館（横浜市中区）に立ち寄り、館で過去に発行したパンフレット（会報16号）をパラパラめくっていたところ、偶然にも、特別展示「ララってなあに?、日本を助けたおくりものーララ物資にみる海外日系人との絆」を終えて、という特集記事を発見しました。そしてこの中に『日系人の夜明け、在米一世ジャーナリスト浅野七之助の証言』という資料が掲載されており、なぜか発行元が岩手日報社となっていましたので、その理由を知りたく調べてみました。その結果、浅野七之助という人物は、明治27年岩手県盛岡市の生まれで、平民宰相・原敬のもとで書生を5年間勤め、大正6年にア

メリカに渡り、農場での労働やスクール・ボーイ（学僕）等の経験をした後、邦字新聞の記者をしていた経歴の持ち主です。

ララ物資は確かにアメリカからの支援によるものであることは事実でありますが、実現にあたっては、アメリカの日系人が大きな役割を担っており、彼らは第二次大戦中に、強制収容所に入れられるなど非常につらい状況を強いられ、終戦により収容所から戻ってからの生活は、まさにゼロからスタートでした。このような窮乏の中でも母国日本の窮状を知り、日本救済運動を起こしたのです。こうしてララ設立につながる「日本難民救済会」を昭和21年1月に発足させました。一説には救援物資の20％は日系人が集めたものだといわれています。

この活動の中心的な役割を果たされた人物として浅野七之助がいました。浅野は、ララ物資送付の運動を組織し、精力的な努力によって実現させました。当初、GHQが意図的に公にしなかったこともあり、また当時の厚生省の報告書にも運動の背景がきちんと伝えられておらず、ほとんどの人々は知らなかったようです。

このことについて浅野は著書（『在米四十年：私の記録』有紀書房　昭和37年発行）で次のように述べています。「なんたるこすいやり方だろう。われわれ海外日本人のせっかく心をこめた贈り物が日本の人々に伝えられていない。もしこれが在外の温かい贈り物だとわかったら故国民は一層喜んだことだろう」と、若干怒りを込めて書かれている。アメリカに移民した日系人たちが戦後の貧しい生活の中から寄付を出し合って、祖国日本のために送ったものであることを考えれば、浅野が怒るのもやむを得なかったでしょう。後日、誤解を招いた厚生省の報告書編集担当者にララ救済会の発端と、その裏面活躍について直接語ったところ大いに恐縮し、追加出版の際は訂正する旨語っていたそうであるが、その後も約束は守られていなかったようである。

浅野の友人の弁によれば、カリフォルニアにおいても会話は終生盛岡弁で通し、自宅の壁には岩手山の写真が貼られてあったそうです。何か本人の強い愛郷の念が偲ばれるような気がします。

浅野の心情を忖度すると、浅田次郎の『壬生義士伝』でお馴染みの元南部藩士「吉村貫一郎」の次のセリフが思い出されます。

「南部盛岡は日本一の美しい国でござんす。西に岩手山がそびえ、東には早池峰。北には姫神山。城下を流れる中津川は北上川に合わさって豊かな流れになり申す。春には花が咲き乱れ、夏は緑、秋には紅葉。冬ともなりゃあ、真綿のごとき雪ここにすっぽりとくるまれるのでござんす」。

あらためて、日本国全体の戦後の窮状を救うために中心的役割を果たした人物がふるさとの先人であったことに誇りとともに畏敬の念を覚えます。

ジュンとの別れ

（昭和19年「戦時犬猫供出令」の話）

石鳥谷　六彦

整司伯父は不思議な顔をして言うのであった。

「ジュン？　六彦はあの犬のごと知ってるのが・・・お前がまだ生まれでねー頃に飼ってだ犬だぞ」。

そばで話を聞きながら、私にビールを勧めてくれる伯母が助太刀をしてくれて、

「なんたら、お爺さん、ジュンでなくてジョンだとさ・・・年取るど耳悪ぐなってすまって。六彦、懐いだジョンを貰って帰るって裕子と大騒動した犬のジョンのごだどさ」。

「そうが、ジョンなっ・・・あの犬も最後は可哀そうなごどすてすまた。フェラニアにやられでな、昔、予防注射などねがったがら、毎晩蚊に刺されねえよぬフマキラーかげでやったども、わがねがった。苦るすんで死ですまた・・・」。

私は、幼い頃にこの家で飼っていたシェパード犬のジョンと楽しく遊んだことを懐かしく思い話題にしたら、なにやら伯父は勘違いしたらしく、戦前に飼っていたジュンという犬を思い浮かべたらしいのだ。

私は昨年亡くなった父の新盆で帰省した折、母の実家の墓参りもついでにしたのだった。この家の孫の中で、私がいちばん遊びに来たと伯父は、嘘か本当かいつもの法螺話調で言うのであった。

確かにちょこちょこ遊びに来たことは確かだ。喧嘩ばかりしていた一つ年上の裕子がいたし、愉快な八郎叔父に遊んでもらうのが楽しみだった。それよりなによりこの家には珍しい植物があり、それらを見ているだけで夢が広がるのだった。当時としては珍しいポポーの木、ビックリグミ、マルメロの木や這松等々があって植物好きの自分にはお宝の詰まった家だったのである。なによりもいつも笑顔で迎えてくれる祖母がいたからでもある。従妹達みんなから好かれる懐の深い十人もの子供を産んだ元気なおばあさんなのだ。

伯父は植物と犬の話をすると大満足で、普段は呑まないビールを流

し込んでいた。しかし、さきほどのジュンという犬の話では少々顔が曇って気にかかっていたので聞いてみることにした。

「おんちゃま、ジュンという犬もシェパードだったのすか」。

「ああー、賢いシェパードだったじゃ・・・本当にこいずごそ可哀そうだったじゃ」

としんみりとジュンの思い出を語ってくれたのである。それはお盆でもあるのか、ジュンの話をして供養をしているようにも感じられるものだった。

伯父の飼っていたシェパードのジュンは、人間の言葉と心を理解できるたいそう利口な犬で、当時としては珍しい家族の一員扱いをした犬だったとポツリポツリと語り始めた。

ある冬の夜のこと、整司の父の丑三が寄り合いの帰り道、毛糸の帽子を落としたのを家に着いてから気が付いたんだそうだ。よっぽど美味い寄り合い酒だったようで相当にご機嫌で帰ってきて、家に入ろうとして帽子を取ろうとしたら無かったとのこと。整司は土間に寝ていたジュンを起こし、

「ジュン、とっちゃシャップ落どすたど、めっけでこい、道端さ落づでるはんて」を聞くなり、ものの五分もしないで帽子をくわえて戻ってきたのです。丑三爺様は大喜びしてジュンの頭を撫でながら、「ジュンの米二十俵は高げがったども、本当にお前は利口でええ犬だ」と褒めだんだと。

自作農だが大百姓でもない家なのに、米二十俵で花巻の調教師から手に入れたというから、この整司親子の犬好きは半端でなかったのか、それとも大変な気儘な若旦那だったとしか思えない。米二十俵は当時の価値としては、並みの百姓家が一年間十分過ぎるほど豊に暮らせるものでした。伯父自身が今になって不思議に思っているのは、二百俵位の収穫しかない農家で、犬のために二十俵も出したということの大胆で無謀だった昔の家風に溜息をついているのである。

華々しく始めた戦争が、なにやら危うい状況を田舎の百姓達にも感じられるようになりました。口には出せないがその危なさとは、東北の片田舎の学問もない百姓でも感じる、新聞やラジオが嘘を流し始めたことでした。

その内、物不足は決定的に負け戦に突進していることを暗示しており、特に米不足が騒がれるようになり農家が万一のために密かに隠している米を、役人が嗅ぎ回りはじめ、強制的に供出させ始めたのです。

米作りをする働き盛りの多くが出征し、田畑の手入れ不足になり、更に肥料の生産が低下し十分に施肥出来なくなり収穫量がどんどん下がっていたのでした。戦地の兵隊の食糧さえ十分確保できなくなった模様で、とうとう難局を抜け切る手段のない状況になり、悪循環に突入したのでした。最後の手段とお上、つまり軍部は、犬一頭で一年に米一俵、猫は一斗食べるとの謂れに引きずりこまれ、犬猫が食べる米にまで手を出し始めたのです。更にこの犬猫の毛皮を軍用にと計画したのでした。

愛すべき動物の食糧を人間に回すために殺処分する方策は、もう人間の思考領域から完全に外れてしまっている状態で、あまりにも心が貧しくなった国のリーダー達が自分自身を失ってしまっていたのです。

整司には幸か不幸か出征の機会が訪れず、いつなったら国のお役にたてるのかと悶々として肩身の狭い思いをしていたのである。お上は、国力を維持できるよう生産の面倒を見る男子をしっかり確保しており、整司はその一人と自分に言い聞かせて、米の生産もお国のためだと

「在京石鳥谷町人会だより」原稿募集

会報「在京石鳥谷町人会だより」に掲載する原稿を募集しています。
テーマは、「ふるさとへの思い」、「最近思うこと」、「町人会へのご意見」、「エッセイ」等々自由です。
会員皆様の会報誌です。どんなことでも結構です。どんどんメッセージをお寄せください。

マッテマース。

≪連絡先≫
広報部担当　飯塚悦子　（Tel　04-7188-0377）
〒270-1123 千葉県我孫子市日秀 83-2

汗を流してきた。しかし、お寺の鐘まで狙われる金物供出当たりから、この戦大丈夫だろうかとの心配が押し寄せるのであった。

とうとう底に突き落とされたのです。役場から飼い犬を連れて出頭するようにという通知がきたのであった。愛犬と別れることを思うと胸が苦しくなり、何にこの気持ちをぶつけたらよいものか悩み苦しんだのである。家族みんなに、近所の人達からも愛されたジュンと別れなくてはならない、今までに経験のしたことのない苦しみを味わっていた。どうせ殺される命ならいっそ自分の手でとも思い、まず父親に打ち明けたら、愛するものを死ぬ運命にあっても決して殺めてはならぬと厳しく諌められたそうだ。当然の事で十分納得した助言だった。

ここまで話すのがやっとなのか、へそ曲がり爺の目には薄っすら涙が溜まっていた。急に話が方向転換し、「六彦は、テレビで“太陽に吠えろ”を見だごどあるか」私はこのドラマが好きでよく見ており、現実離れしたアクション展開が大好きで、もしもチャンスあらば、このようなドラマ作家に職業転向したいものだと夢を描いていたものだが、石油一筋で冒険はできなかった。「裕次郎のテレビドラマ、よく見たよ」と私が言ったら、笑顔がほころび始めて「あそごに出でくる警察犬な、ジュンそっくりでビックリしたのさ・・・ジュン譲ってくれだ花巻の調教師さ話すたらば、なんと同じ血筋の犬だとのごとで、すっかり納得したごどあったー」「えーつ、俺にとっては、シェパードは皆同じ顔に見えるんだが・・・」「この馬鹿たれ、一匹一匹違うのさ・・・」この会話で少々おセンチになっていた伯父は心が軽くなったのか、ジュンの出頭話を再開した。

出頭の朝、整司は今までになかったくらい丁寧にブラシをかけ語りかけてやりました。ブラシをかければかけるほどジュンは立派に見えました。

近所の酪農家より特別に牛乳を分けてもらい、白いご飯にかけてやり、家族みんなの見守る中、大好物の食事をしました。利口なジュンには家族の流す涙は別れの涙と分っており、一人一人差し伸べる手を舐めて別れの挨拶をしたのでした。

普段の散歩とは違い、役場に向かう足取りは重く、切ないもので、できるなら時間が止まって欲しい、そうでなければ、たっぷりの時間が欲しいと思うのだが、あっという間に役場に着いてしまいました。

道々整司の頭の中は、今自分の置かれている微妙な立場であった。お上は、総ての成人男子に召集をかけていたわけではない、要物資を最低限生産できるようまわりの面倒を見る役割の自分だが、兵隊として役立ちたいと自問自答していた。

今か今かと待っていた召集令状が自分ではなく愛犬のジュンにきたように思え、恥ずかしさでいっぱいになり足が重かったと語った。これだけは正直な気持ちではなかったかと優しく頷いて理解してあげたのだった。

隠し米を強制供出、戦死広報が多くなるに付け、勝利への疑問がふつふつと湧き、なんとお上は無慈悲なことをする、こんなことをしなければこの戦は勝てないのだろうか？なにものえも抗うことのできない自分が本当に情けなく思ったそうである。

長い間可愛がった愛犬が、食糧難のために殺されるとあっては、あまりにも悲しいやり切れない気持ちで溢れていた。普段の散歩ならジュンは、あちこち引きずり回しては楽しんでいるのだが、今日は何かを心得ているようで、素直に整司の歩調に合わせていた。

役場の庭には臨時の犬の繋ぎ場が設けられていて、たくさんの犬が

「在京石鳥谷町人会」会員募集

当会は、石鳥谷町出身者およびご縁のある方々を会員としてお互いの親睦と融和を図り、ふるさと石鳥谷（花巻）との交流を深め、お互いの発展向上を図ることを目的とし活動しています。

毎年１回(11 月初旬)「上野精養軒」にて親睦交流会を開催しており、「ふるさと交流」の一環として石鳥谷の各地域の郷土芸能を披露して頂くなどとても楽しい会です。知人、同級生、町人会に関心のある方等に是非お声かけいただきお誘いくださるようお願いいたします。

なお、本会ではホームページを開設しております。関心のある方は「在京石鳥谷町人会」で検索してください。ご意見や掲載したい情報等ありましたならば、表紙掲載の事務局までお寄せくださるようお願いします。

繋がれてキャンキャン悲しい声をあげていました。しかし、ジュンは騒ぐことなく、シャンと座り、整司をジーと見続け、なにもかも悟っている利口過ぎる姿が哀れに思えるのでした。きちんと調教され、悲しさに耐えていることがしっかり伝わることが、殊更整司の心に響くのであった。いいんだよ別れが辛いと声をあげて泣いていいんだよと言いたかった。だがジュンは毅然と座っている。改めてジュンの立派な姿勢を大いに褒め、涙を流したのです。軍のトラックに乗せられるまで待って、別れようと思いましたが、耐えられないので、ジュンと目を合わせて互いに頷きあって、最後の別れをして役場を去りました。

家に帰った整司は、放心状態で土間のジュンの寝床を見つめていました。そこへ外から声がしました役場の職員が自転車で飛んできたのです。「整司さん、役場さ、えっとご間来てけろ、おめさんの犬、言うごときかねくてわがね・・・噛みつきそうで、おっかねじゃ」

整司はこの声を聞いてほっとしました。ジュンが自分自身を守ろうとする時の勇ましい形相を思い浮かべました。やっぱりジュンは殺されると思っていたんだ。死にたくなかったんだ。偉いぞジュンと心で褒めました。早速もう一本の綱を持ち役場へ向かいました。

ジュンだけが繋がれ、さっきと変わらずシャンと座っており、役場の職員が待ちかねていたらしく、「まんず、整司さんの犬だげはなんともならね、大人しそうだと思って安心すてだら、噛みつきそうになって、ゆごどきがねのす、噛み殺されるがど思たじゃ」と泣き言をいうのであった。

この犬狩りに軍の将校が責任者として来ていたが、役場の接待でこの現場には顔を出さなかったが、手こずるシェパードがいるということで腰をあげて、状況を見に来たところだった。将校はジュンを見るなり、「おっー、この犬は屠殺場へは連れてくな・・・・立派なシェパードだ、軍用犬にする」整司はこの指示を耳にして、ジュンの頭を撫でて泣きました。

「お前えがったなー、親父の言う通りだった。ちゃんとお役にたてよ」と言って持ってきたもう一本の綱を役場の職員に渡しました。二本の綱に首をおさえられて、軍用車に引きずられたのですが、ジュンはびくともしませんでした。そこで整司は、「綱っこ、ぺっこを緩めでけろ」とお願いしたら、ジュンは歩く姿勢になり、首を回し整司見つめました。その目には、今までに見たこともない涙で潤んでいたのです。それから、悠々と軍用トラックに架けられた板橋を登って行ったのです。

ここまで話す伯父の気持ちは相当につらい状況にあったことは想像できました。「六彦よ、あの時はせつながった。犬が涙っこ流すとはすらねがった。おれが兵隊さいがねがったがら身代わりで行っただな。なんたに役立ったか、便りこもらいだがった。・・・そのぐらいの気持ちあれば戦は勝ってだのす」

全く伯父の言う通り、提供した飼い主に活躍や手柄の便りを出す軍であれば日本が勝っていたに違いないと伯父と同じく思った自分がいた。本当に犬が涙を流すのかと問い直したいが、とてもそのような雰囲気になれず、ここは後日、動物好きか学者に聞いてみることにした。伯父は話し尽くしたらしく、すっきりしてテープレコーダーのスイッチを入れた。

「さー盆だ盆だ・・・戦艦山城で死んだ六介、軍用犬のジュンの供養だじぇ」と言って本山永平寺の勤行のテープをガンガン流すのだった。

編集後記

令和初の「在京石鳥谷町人会だより」です。広報部員10名がそれぞれ役割分担をしながら会長はじめ各幹事の協力のもと活動しています。

「在京石鳥谷町人会だより」は平成18年9月1日創刊号（第1号）が発行され現在（第25号）に至っています。会員皆様のご協力のおかげです。これからも情報の提供をお待ちしております。

今回の台風15号で被害にあわれた方、心からお見舞い申し上げます。特に千葉県は被害甚大です。私も千葉県在住ですが幸い被害はありませんでした。近年の自然災害は想定外の大きさです。

地球温暖化と関係があると思われますが、スウェーデンの勇気ある16歳の少女グレタ・トゥーンベリさんの活動が注目されています。「未来の世代への裏切りは許さない」と涙ながらに世界に訴えています。また世界中の若い世代が「世界気候ストライキ（日本は約5000人が参加）」で行動を起こしています。

地球を汚したのは大人達。今が考えるとき!!（先延ばしにはできない）。小泉環境相に期待するところ「大」です。

飯塚　悦子